エコバッグを用いた万引きの現状と対策の検討

―パート・アルバイト店員を対象とした調査から―

Current Situation and Its Countermeasures Against Shoplifting via Eco-Bags: A Survey of Part-Time Store Clerks

大久保　智　生[1]　・　皿　谷　陽　子[2]

Tomoo Okubo, Yoko Saragai

要旨

本研究ではパート・アルバイト店員を対象として，レジ袋有料化以降のエコバッグを用いた万引きの現状と対策について検討することを目的とした。パート・アルバイト店員248名に対して，レジ袋有料化以降の万引きの現状と対策，防犯意識，ホスピタリティ，防犯対策を尋ねた。分析の結果，パート・アルバイト店員はレジ袋有料化以降，エコバッグの使用が増加したと考えており，エコバッグ不正使用への声かけを実施しておらず，声かけが困難であると感じていることが明らかとなった。また，店員はエコバッグによる万引き対策未着手群，エコバッグによる万引き対策着手群，エコバッグによる万引き対策無関心群に分類され，群によって防犯意識，ホスピタリティ，防犯対策が異なり，関連の仕方が異なっていた。以上の結果を踏まえ，レジ袋有料化以降のエコバッグを用いた万引き対策の方向性が論じられた。

キーワード：万引き，エコバッグ，防犯意識，ホスピタリティ，パート・アルバイト店員

問題と目的

日本における万引き被害の規模は莫大であり，店舗における万引き対策は喫緊の課題となっている。最近では，2020年７月のレジ袋有料化以降，エコバッグを使用した万引きの増加が指摘されており，大きな社会問題となっている。しかし，実際にレジ袋有料化によってエコバッグを使用した万引きが増加しているのかについては明らかになっていないことから，本研究では，パート・アルバイト店員を対象として，エコバッグを使用した万引きの現状と対策について検討を行っていく。

万引き防止に関する研究は，数が多くないという指摘（大久保・堀江・松浦・松永・江村・永冨・時岡，2012；Krasnovsky & Lane, 1998）もあるが，近年，高齢者の万引きが注目されていることからも，高齢者の万引きに焦点を当てた論文が増加してきている（江崎，2017；星，2018；斉藤，2018；矢島，2018）。しかし，犯罪機会論に基づくと，店舗での万引き対策に焦点を当てた研究のほうが実際の万引き防止において有益な知見が得られるのではないかと考えられる。したがって，本研究では店舗での万引き対策に焦点を当て，近年，注目を集めているエコバッグを使用した万引きについて検討していく。

これまで，店舗での万引き対策としては，特に防犯カメラの効果などが検討されてきた（全国万引犯罪防止機構，2010）。現在では，大規模店舗を中心に，防犯カメラを活用した顔認証システムや不審者検知システムなどが万引き対策として導入されてきている。顔認証システムは登録された顔の認証により個人を特定するものであり，再犯防止において有効であるが，登録基準が曖昧であるため，個人情報保護の観点から運用上の問題が指摘されている。不審者検知システムは，不審者や不審な行動を事前に検知するものであり，予防において有効であるが，一部の心理状態の推測を行う不審者検知システムは心理状態を全く測

1　香川大学
2　人間環境大学

定していないという研究結果もあるため，現時点ではどの不審者検知システムも有効性は限定的であると考えられる（大久保・谷・稲垣・鈴木・永冨，2018）。さらに，顔認証システムや不審者検知システムなどの高額なシステムを導入しても使うのは人であることからも，万引き対策においては，ハード面だけでなく，ソフト面の対策に焦点を当てる必要がある。

先行研究の結果から，ソフト面の対策である客の観察や店員教育などが万引き対策として有効であることが指摘されている（大久保・堀江・松浦・松永・永冨・時岡・江村，2013）。また，海外の研究（Lindblom & Kajalo, 2011）でも，ソフト面の対策が万引き対策として有効であることが指摘されている。現在では，ソフト面の対策の中でも万引きGメンの発案の下，香川県で開始した「未然防止のための店内声かけ」（大久保・岡田・時岡・堀江・松下・高橋・尾崎・藤沢，2013）が全国的なトレンドになっており，商品を隠匿している客に対して，積極的に声かけを行っていくことが推奨されている（大久保，2019）。積極的に未然防止のための店内声かけを行うためには，店員のホスピタリティを向上させ，万引きGメンのように客の行動を観察することが求められる（大久保，2019；Okubo, 2021）。大久保・皿谷（2020）が示しているようにホスピタリティの高い店員は防犯意識が高いことからも，レジ袋有料化以降のエコバッグ万引きの対策においても，ホスピタリティと防犯意識の観点から検討していく必要がある。

2020年７月のレジ袋有料化以降，制度の是非は議論されているが，万引きが増加したという論調に対して疑問は投げかけられていないのが実状である。万引きについては暗数が多いため，実際にレジ袋有料化以降，万引きが増加しているかを統計資料から判断することは困難である。したがって，実際に万引きが起こる店舗を対象とした研究が求められており，レジ袋有料化以降，店舗が万引き犯罪は増加したと認知しているのか，エコバッグを使用した万引きに対して新たな対策を行っているのかについて検討する必要がある（Okubo & Saragai, 2022）。こうしたレジ袋有料化以降の万引きの現状と対策を明らかにすることで，新たな万引き対策の方向性を探ることが可能になるといえる。

レジ袋有料化以降の万引きの現状と対策を明らかにする際，対象としては店舗責任者とパート・アルバイト店員が想定される。店舗で最も万引き対策に熱心であり，対策の方向性を決めることができるのは店舗責任者である。こうした観点から，Okubo & Saragai（2022）は店舗責任者を対象として，レジ袋有料化以降の万引きの現状と対策について調査を行った。その結果，店舗責任者はレジ袋有料化以降，万引きが増加したと考えており，エコバッグを使用した万引き犯罪を把握できておらず，エコバッグを使用した万引き対策を実施していない店舗が多いことが明らかとなっている。一方，パート・アルバイト店員は防犯意識が低いという研究結果（大久保・堀江・松浦・松永・永冨・時岡・江村，2013）が示されているように，パート・アルバイト店員は店舗責任者とは異なる認識をしている可能性もある。したがって，本研究では，パート・アルバイト店員を対象とした調査を行うこととする。

以上を踏まえ，本研究では，パート・アルバイト店員を対象とした調査を行い，レジ袋有料化以降のエコバッグを用いた万引きの現状と対策について明らかにし，パート・アルバイト店員の防犯意識および，ホスピタリティ，防犯対策について検討することを目的とする。具体的には，まず，レジ袋有料化以降の万引き犯罪の現状と対策について検討を行い，レジ袋有料化以降の万引き犯罪の現状と対策に基づいてパート・アルバイト店員を類型化する。次に，類型ごとに防犯意識，ホスピタリティ，防犯対策に差があるのかについて検討を行い，防犯意識，ホスピタリティが防犯対策に及ぼす影響について検討する。

方法

対象者

スーパー，コンビニ，ドラッグストア，ホームセンター，書店，家電量販店のパート・アルバイト店員248名を対象とした。なお，内訳はスーパー146名，コンビニ48名，ドラッグストア31名，ホームセンター11名，書店８名，家電量販店４名であった。

手続き

レジ袋有料化から１年経った2021年７月にWEB調査会社を通じて，アンケート調査を実施した。回答は全て無記名で行い，回答者のプライバシーに配慮した。調査前に結果の数量化（匿名化），個人情報が特定されない旨を伝え，承諾した者のみ回答を行ってもらった。

調査内容

調査では，（１）レジ袋有料化以降の万引き犯罪の現状と対策，（２）防犯意識，（３）ホスピタリティ，（４）防犯対策について尋ねた。

（１）レジ袋有料化以降の万引き犯罪の現状と対策　レジ袋有料化以降の万引き犯罪の現状と対策について，①レジ袋有料化以降の万引きの増加の認知，②レジ袋有料化以降のエコバッグ使用の増加の認知，③エコバッグ不正使用への声かけの実施，④エコバッグ不正使用への声かけの困難さ，⑤エコバッグの不正使用客の存在を尋ねた。①レジ袋有料化以降の万引きの増加の認知ではレジ袋有料義務化（令和２年７月）以降，自分の店で万引きの件数が増えたと感じるかについて尋ねた。②レジ袋有料化以降のエコバッグ使用の増加の認知では，レジ袋有料義務化（令和２年７月）以降，自分の店でエコバッグの使用が増えたと感じるかについて尋ねた。③エコバッグ不正使用への声かけの実施では，店内でカゴを使わずに，エコバッグに商品を入れて買い物する客に声かけを行っているかについて尋ね

た。④エコバッグ不正使用への声かけの困難さでは，店内でカゴを使わずに，エコバッグに商品を入れて買い物する客に声かけをするのが難しいと感じるかについて尋ねた。⑤エコバッグの不正使用客の存在では，カゴを使わずにエコバッグに商品を入れて買い物する客がいるかについて尋ねた。回答形式は，①から④までが「全くあてはまらない」（１点）から「非常にあてはまる」（５点）までの５件法，⑤が「いる」と「いない」の２件法であった。

（２）防犯意識　防犯意識については，皿谷・大久保・平（2020）の防犯意識尺度の「店内や対応への注意」，「連携や情報への関心」，「油断や隙の無さ」の因子負荷量の高い３項目ずつ計９項目について尋ねた。回答形式は「全くあてはまらない」（１点）から「非常にあてはまる」（５点）までの５件法であった。

（３）ホスピタリティ　ホスピタリティについては，山岸・豊増（2009）の日本版ホスピタリティ尺度の「サービス提供力」，「歓待」，「顧客理解力」の因子負荷量の高い３項目ずつ計９項目について尋ねた。回答形式は「全くそうでない」（１点）から「全くそうである」（７点）までの７件法であった。

（４）防犯対策　店舗での防犯対策については，大久保・皿谷・平（2020）の防犯対策尺度８項目を使用した。回答形式は「全くあてはまらない」（１点）から「非常にあてはまる」（５点）までの５件法であった。

結果と考察

レジ袋有料化以降の万引き犯罪の現状と対策の検討

レジ袋有料化以降の万引き犯罪の現状と対策について検討を行うため，各項目の回答の割合を算出した（Figure 1）。レジ袋有料化以降の万引きの増加の認知では，「全くあてはまらない」「どちらかというとあてはまらない」と答えた者が21.4％で，「非常にあてはまる」「どちらかというとあてはまる」と答えた者が30.2％であった。レジ袋有料化以降のエコバッグ使用の増加の認知では，「全くあてはまらない」「どちらかというとあてはまらない」と答えた者が8.1％で，「非常にあてはまる」「どちらかというとあてはまる」と答えた者が68.5％であった。エコバッグ不正使用への声かけの実施では，「全くあてはまらない」「どちらかというとあてはまらない」と答えた者が43.1％で，「非常にあてはまる」「どちらかというとあてはまる」と答えた者が17.7％であった。エコバッグ不正使用への声かけの困難さでは，「全くあてはまらない」「どちらかというとあてはまらない」と答えた者が18.5％で，「非常にあてはまる」「どちらかというとあてはまる」と答えた者が49.2％であった。エコバッグの不正使用客の存在の有無では，「いる」と答えた者が39.8％であった。

以上の結果から，レジ袋有料化以降の万引きの増加の認知については，増加していないと感じるパート・アルバイト店員も一定数存在していることが示された。この結果を鑑みると，レジ袋有料化以降，万引きが増加したと結論づけるのは時期尚早であるといえる。本研究では，レジ袋有料化の影響を受けたと考えられる店舗のパート・アルバイト店員を対象としたが，スーパーは多大な影響を受けたと考えられる一方で，家電量販店などではスーパーほどの多大な影響はないと考えられる。本研究では，ホームセンター，書店，家電量販店のパート・アルバイト店員のサンプルが少なかったため，業種による検討は行わなかったが，業種によって万引き対策や意識が異なることが大久保他（2017）によって示されていることからも今後，ホームセンター，書店，家電量販店のパート・アルバイト店員の

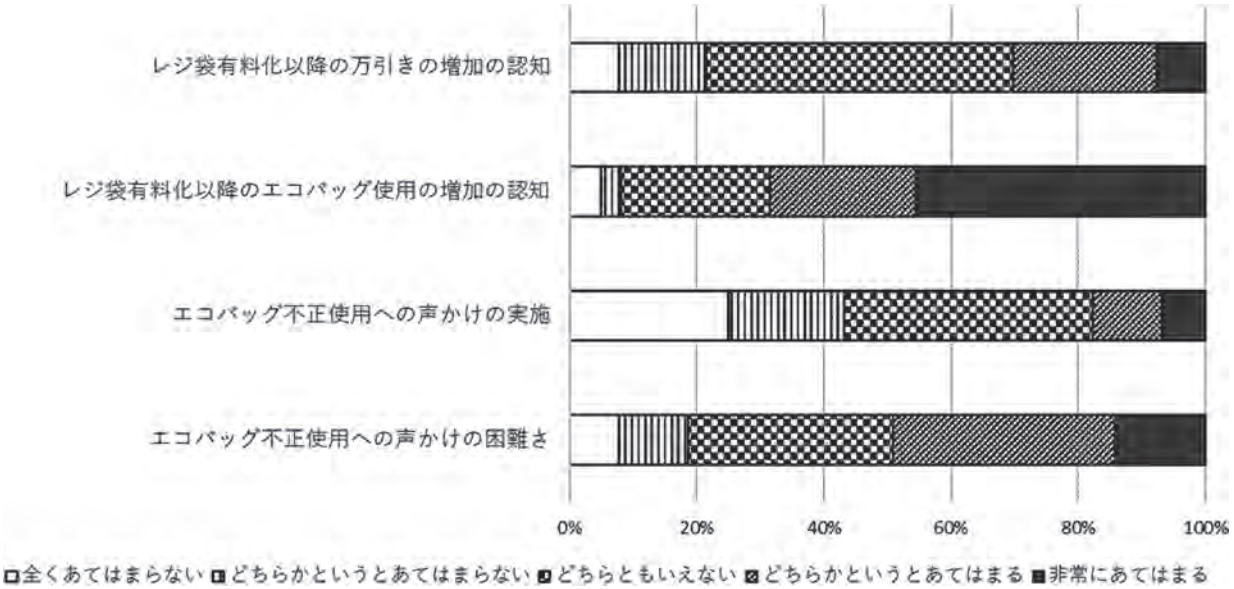

Figure 1　レジ袋有料化以降の万引き犯罪の現状と対策

サンプルを増やし，詳細に検討を行う必要があるといえる。レジ袋有料化以降のエコバッグ使用の増加の認知については，約７割のパート・アルバイト店員が増加したと感じていることが示された。この結果を鑑みると，レジ袋有料化以降，エコバッグが使用されるようになったことは明白な事実であるといえる。したがって，エコバッグに特化した対策を考案し，対策を実施していく必要があるといえる。エコバッグ不正使用への声かけの実施については，約４割のパート・アルバイト店員が実施していないことが示された。この結果を鑑みると，エコバッグを使用した万引き対策はあまり実施されていないのが現状であるいえる。エコバッグを使用した万引き対策の実施は新たな万引きへの対策であるため，対策実施へのハードルが高いことが要因として考えられる。エコバッグ不正使用への声かけの困難さについては，約４割のパート・アルバイト店員が困難であると感じていることが示された。この結果を鑑みると，エコバッグを不正使用する客への声かけは現在の状態では難しいといえる。これは，エコバッグの不正使用は見分けがつきにくく，どのように声かけするのがよいのかがわからないことが要因として考えられる。エコバッグの不正使用客の存在の有無については，約４割のパート・アルバイト店員が存在しているとしていることが示された。この結果を鑑みると，一定数の客がエコバッグを用いた買い回りを行っているといえる。エコバッグの不正使用をどのように減らすのかが今後の対策のポイントになると考えられる。

レジ袋有料化以降の万引き犯罪の現状と対策による類型化

レジ袋有料化以降の万引き犯罪の現状と対策をもとに類型化を行うため，エコバッグの不正使用客の存在の有無を除くレジ袋有料化以降の万引き犯罪の現状とその対策の得点をz得点に換算し，クラスター分析を行った（Figure 2）。その結果，各クラスターに含まれる参加者の数，クラスターの解釈可能性から総合的に判断し，３クラスターによる分類が妥当であると考えられた。各クラスターの特徴としては，第１クラスターはレジ袋有料化以降の万引きの増加の認知が低く，レジ袋有料化以降のエコバッグ使用の増加の認知が高く，エコバッグ不正使用への声かけの実施が低く，エコバッグ不正使用への声かけの困難さが高いことから，エコバッグによる万引き対策未着手群であると解釈した。第２クラスターはレジ袋有料化以降の万引きの増加の認知が高く，レジ袋有料化以降のエコバッグ使用の増加の認知が高く，エコバッグ不正使用への声かけの実施が高く，エコバッグ不正使用への声かけの困難さが高いことから，エコバッグによる万引き対策着手群であると解釈した。第３クラスターはレジ袋有料化以降の万引きの増加の認知が低く，レジ袋有料化以降のエコバッグ使用の増加の認知が低く，エコバッグ不正使用への声かけの困難さも低いことから，エコバッグによる万引き対策無関心群であると解釈した。なお，それぞれの群の内訳は，エコバッグによる万引き対策未着手群が84名，エコバッグによる万引き対策未着手群が89名，エコバッグによる万引き対策無関心群が75名であった。

以上の結果から，パート・アルバイト店員は万引き犯罪の現状と対策の得点から，エコバッグによる万引き対策着手群，エコバッグによる万引き対策未着手群，エコバッグによる万引き対策無関心群に分類された。この結果から，Okubo & Saragai（2022）と同様に，エコバッグによる万引き対策着手群と未着手群に分類されることが示された。ただし，Okubo & Saragai（2022）と異なり，本研究ではエコバッグによる万引き対策無関心群の存在も示唆された。パート・アルバイト店員の中には万引き対策に無関心な者も存在していることから，こうした群の存在は納得のいく結果であるといえる。

防犯意識，ホスピタリティ，防犯対策の類型による差の検討

類型による防犯意識，ホスピタリティ，防犯対策の差の検討を行うため，類型を独立変数としたt検定を行った

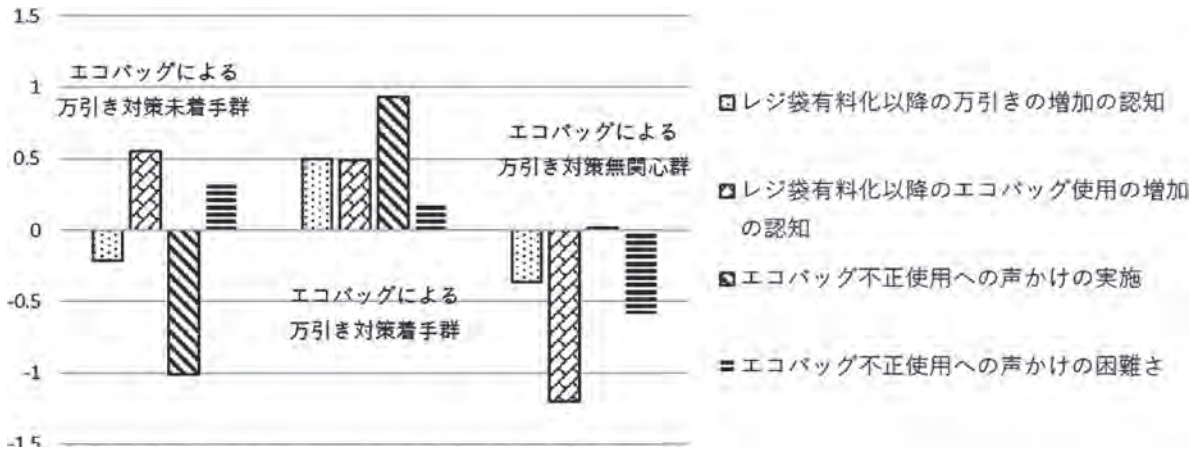

Figure 2　レジ袋有料化以降の万引き犯罪の現状と対策による類型化

Table 1　類型別の防犯意識，ホスピタリティ，防犯対策の平均値と１要因分散分析結果

	エコバッグによる万引き対策未着手群	エコバッグによる万引き対策着手群	エコバッグによる万引き対策無関心群	*F*値
店内や対応への注意	2.901（0.968）	3.438（0.857）	3.129（0.723）	8.532***
連携や情報への関心	3.889（0.868）	4.041（0.755）	3.529（0.750）	8.779***
油断や隙の無さ	3.595（0.762）	3.577（0.740）	3.142（0.649）	9.898***
サービス提供力	3.754（1.108）	3.884（1.064）	3.769（1.138）	0.359
歓待	4.619（1.150）	4.738（1.246）	4.191（1.234）	4.477*
顧客理解力	3.778（1.140）	4.030（1.147）	3.764（1.200）	1.417
防犯対策	2.877（0.842）	3.398（0.782）	3.187（0.586）	10.486***

$^{*}p<.05$　$^{***}p<.001$

Table 2　類型別の防犯意識とホスピタリティが防犯対策に及ぼす影響

	エコバッグによる万引き対策未着手群	エコバッグによる万引き対策着手群	エコバッグによる万引き対策無関心群
店内や対応への注意	.498***	.443***	.431*
連携や情報への関心	-.072	.194†	.224†
油断や隙の無さ	-.107	.054	-.013
サービス提供力	-.049	.075	.167
歓待	.078	.060	-.209
顧客理解力	.220	.093	.141
R	.595***	.709***	.644***

$^{\dagger}p<.1$　$^{*}p<.5$　$^{***}p<.001$

（Table 1）。その結果，防犯意識の「店内や対応への注意」（$F(2, 245)=8.532$，$p<.001$），「連携や情報への関心」（$F(2, 245)=8.779$，$p<.001$），「油断や隙の無さ」（$F(2, 245)=9.898$，$p<.001$），ホスピタリティの「歓待」（$F(2, 245)=4.477$，$p<.05$），防犯対策（$F(2, 245)=10.486$，$p<.001$）において，３群間に有意差が認められた。多重比較の結果，「店内や対応への注意」では，エコバッグによる万引き対策着手群がエコバッグによる万引き対策未着手群よりも有意に得点が高かった。「連携や情報への関心」と「油断や隙の無さ」では，エコバッグによる万引き対策未着手群とエコバッグによる万引き対策着手群がエコバッグによる万引き対策無関心群よりも有意に得点が高かった。「歓待」では，エコバッグによる万引き対策着手群がエコバッグによる万引き対策無関心群よりも有意に得点が高かった。防犯対策では，エコバッグによる万引き対策着手群とエコバッグによる万引き対策無関心群がエコバッグによる万引き対策未着手群よりも有意に得点が高かった。

以上の結果から，エコバッグによる万引き対策着手群については，防犯意識が高く，ホスピタリティの歓待が高く，防犯対策をとっていることが示された。これまでの研究（大久保，2018）で明らかになっているように，万引きの多い店舗は対策も行っていることからも，パート・アルバイト店員がエコバッグ万引きの多さを認知することは防犯意識の向上や対策をとることにつながると考えられる。エコバッグによる万引き対策未着手群については，防犯意識が低く，防犯対策をとっていないことが示された。エコバッグによる万引き対策未着手群においては，まず，防犯意識を向上させ，防犯対策の重要性を学ぶ教育が重要になると考えられる。エコバッグによる万引き対策無関心群については，防犯意識の連携や情報への関心と油断や隙の無さが低く，ホスピタリティの歓待が低く，防犯対策をとっていることが示された。エコバッグによる万引き無関心群は防犯対策をとっているものの，防犯への関心が低く，ホスピタリティが低いことから，防犯に関心を向け，客との積極的なコミュニケーションをとることが重要になると考えられる。

防犯意識，ホスピタリティ，防犯対策の関連の類型別の検討

類型別の防犯意識，ホスピタリティが防犯対策に及ぼす影響について検討するため，群別に重回帰分析を行った（Table 2）。その結果，エコバッグによる万引き対策未着手群では，「店内や対応への注意」（$\beta=.498$，$p<.001$）が防犯対策に正の影響を与えていた。エコバッグによる万引き対策着手群では，「店内や対応への注意」（$\beta=.443$，$p<.001$）と「連携や情報への関心」（$\beta=.194$，$p<.1$）が防犯対策に正の影響を与えていた。エコバッグによる万引き対策無関心群では，「店内や対応への注意」（$\beta=.314$，$p<.05$）と「連携や情報への関心」（$\beta=.224$，$p<.1$）が防犯対策に正の影響を与えていた。

以上の結果から，エコバッグによる万引き対策未着手群とエコバッグによる万引き対策着手群，エコバッグによる万引き対策無関心群では，防犯意識が防犯対策に及ぼす影響が異なることが示された。店内や対応への注意はどの群においても防犯対策に影響を与えていたが，Okubo（2021）で示されているように万引きGメンは非常に客への注視を行っていることからも，普段の防犯対策をとるために店内や対応に注意することが重要であるといえる。エコバッグによる万引き対策着手群とエコバッグによる万引き対策無関心群では，連携や情報に関心があるほど普段の防犯対策をとっていることが示されたが，エコバッグによる万引き対策着手群では新たな手口などの情報を得ていることが対策につながっていると考えられる。一方，エコバッグによる万引き対策無関心群では，連携や情報への関心が低いことが防犯対策をとらないことにつながっていると考えられる。また，ホスピタリティは，どの群においても，防犯対策に影響を及ぼしていないことが示された。ホスピタリティは防犯意識と関連していることがこれまでの研究（大久保・皿谷，2020）で明らかになっているが，本研究では普段の防犯対策に直接影響を与えていなかったことから，防犯意識を介して影響を与えている可能性がある。したがって，今後，ホスピタリティが防犯意識を媒介して防犯対策に及ぼす影響について検討していく必要があるといえる。

総合考察

本研究では，パート・アルバイト店員を対象とした調査を行い，レジ袋有料化以降のエコバッグを用いた万引きの現状と対策について明らかにし，パート・アルバイト店員の防犯意識およびホスピタリティ，防犯対策について検討することを目的とした。まず，レジ袋有料化以降の万引き犯罪の現状と対策について検討を行った結果，パート・アルバイト店員はレジ袋有料化以降，エコバッグの使用が増加したと考えており，エコバッグ不正使用への声かけを実施しておらず，声かけが困難であると感じていることが明らかとなった。また，パート・アルバイト店員はエコバッグによる万引き対策未着手群，エコバッグによる万引き対策着手群，エコバッグによる万引き対策無関心群に分類された。次に，類型ごとに防犯意識，ホスピタリティ，防犯対策に差があるのかについて検討を行った結果，類型によって防犯意識，ホスピタリティ，防犯対策が異なり，関連の仕方が異なっていることが明らかとなった。

レジ袋有料化以降のエコバッグを用いた万引きの現状と対策の検討において，店舗責任者を対象とした調査（Okubo & Saragai, 2022）では，多くの店舗責任者がレジ袋有料化以降，万引きが増加したと回答していたが，本研究ではパート・アルバイト店員において，増加していないと回答する者も一定数存在することが示された。これは類型化とも関わるが，本研究では対策に着手していないパート・アルバイト店員だけでなく，対策に無関心なパート・アルバイト店員も存在していることが要因として考えられる。実際に客と関わるのはパート・アルバイト店員のほうが多いことから，こうした対策に着手していないパート・アルバイト店員や対策に無関心なパート・アルバイト店員の存在を踏まえ，対策を講じていく必要があるといえる。

さらに，防犯意識，ホスピタリティ，防犯対策の検討において，店舗責任者を対象とした調査（Okubo & Saragai, 2022）では，対策に着手している店舗責任者と対策に着手していない店舗責任者であまり差がなかったが，本研究では類型ごとに明確な差があることが示された。店舗の防犯に責任を持つ店舗責任者と異なり，パート・アルバイト店員は防犯へのモチベーションが多様であることを意味しており，防犯へのモチベーションの高い店員を増やしていく必要があるといえる。これまで店舗責任者と従業員では万引きへの意識が異なることが皿谷・平（2017）のアンケート調査で示されており，また，店舗責任者の意欲が店員に伝わり，店舗の雰囲気が変化していくことが大久保（2020）や皿谷・大久保（2021）の店舗責任者を対象としたインタビュー調査で示されている。こうした結果を踏まえると，店舗責任者にアプローチするだけでなく，防犯へのモチベーションの高いパート・アルバイト店員を増やし，防犯対策を自然と行うような店舗の雰囲気を形成していく必要があるといえる。

今後の方向性としては，特に，エコバッグ不正使用に対して声かけを積極的に行っていくことが重要であり，そのためにはポスターなどでエコバッグに関するルールを提示し，このルールを根拠にエコバッグの不正使用を防ぐ声かけを推進していくことなどが必要になる。香川県では，エコバッグを用いた万引きに対応するため，声かけの根拠となるルールを示したポスターを作成し，店員の声かけによる未然防止を推進している（Figure 3）。こうした未然防止の推進においては，客の特徴にあった声かけなどが求められることからも，店員の防犯教育に今後，より力を注いでいく必要があるといえる。

今後の課題としては２点挙げられる。１点目は業種別の対象者に偏りがあったため，業種別の検討を行う必要性である。業種別に万引きの特徴（Bartol & Bartol, 2005）や店舗の万引きへの対応や意識（大久保・綾田・堀江・西村・木村・久保田・白松・尾崎・藤沢，2017）が異なることが明らかになっていることからも，大規模調査を行い，業種による比較を行う必要がある。特に，パート・アルバイト店員を対象とした万引き防止対策に関する調査が少ないことからも，今後はパート・アルバイト店員を対象とした業種別の万引き防止対策について検討していくことが求められるといえる。２点目は新たな制度や仕組みに対応した研究を行う必要性である。近年，セルフレジやレジカートの

Figure 3　ポスター

開発により，店員が客に関わる機会が少なくなってきているが，制度や仕組みも運用していくのは人である。今後は客と店員という人に注目し，それぞれが新たな制度や仕組みをどのようにとらえているのかを明らかにし，新たな制度や仕組みに対応した研究を行っていくことが求められるといえる。

付記

本論文は，JSPS科研費基盤研究（B）課題番号21H00950の助成による研究成果の一部である。また，万引き防止コンサルタントの伊東ゆう氏より，貴重なコメントを頂いた。心より感謝申し上げる。

参考文献

Bartol, C. R. & Bartol, A. M.（2005）. Criminal behavior: A psychosocial approach. 7th ed. New Jersey: Prentice Hall.

江﨑徹治（2017）．万引きを繰り返す高齢者の行動を説明するためのモデル構築　国士舘法研論集，18，123-150.

星周一郎（2018）．高齢犯罪者対策と法的対応のあり方　犯罪社会学研究，43，57-70.

Krasnovsky, T. & Lane, R. C.（1998）. Shoplifting: A review of the literature Aggression and Violent Behavior, 3, 219-235.

大久保智生（2018）．商店街における万引き対策と万引き防止への意識の検討　対人社会心理学研究，18，85-94.

大久保智生（2019）．モデル店舗における集中的な万引き対策の効果：防犯意識とホスピタリティの観点から　日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌，29，19-28.

Okubo, T.（2021）. Gazing targets and feelings toward shoplifters among plainclothes security guards and part-time employees: For education to improve clerk hospitality and crime prevention. International Journal of Japan Academic Society of Hospitality Management, 7, 13-19.

大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・江村早紀・永冨太一・時岡晴美（2012）．万引き被疑者における万引きに関する心理的要因間の関連の検討：家族および友人関係と攻撃性が万引きの心理に及ぼす影響　子育て研究，２，13-20.

大久保智生・綾田栞・堀江良英・西村雅之・木村光宏・久保田真功・白松賢・尾崎祐士・藤沢隆行（2017）．業種別の効果的な万引きへの対応と対策の検討：香川，奈良，高知，愛媛，岩手県の店舗を対象としたアンケート調査から　香川大学教育学部研究報告，147，１-12.

大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・永冨太一・時岡晴美・江村早紀（2013）．店舗における万引きの実態と万引きへの対応と防止対策の検討：香川県内の店長と店員を対象とした聞き取り調査から　法と心理，13，112-125.

大久保智生・岡田涼・時岡晴美・堀江良英・松下昌明・高橋護・尾崎祐士・藤沢隆行（2013）．万引き防止対策におけるエビデンスに基づく社会的実践サイクル：店舗および店内保安員の調査結果に基づく未然防止のための店内声かけマニュアルの作成とその実施　香川大学教育学部研究報告，139，35-51.

大久保智生・皿谷陽子（2020）．店員のホスピタリティと防犯意識の検討：スーパーマーケットでの万引き防止の観点から　日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌，30，９-16.

Okubo, T. & Saragai, Y.（2022）. Current situation and its countermeasures against shoplifting via eco-bags following the introduction of a chargeable plastic bags. International Journal of Japan Academic Society of Hospitality Management, 7, 13-19.

大久保智生・皿谷陽子・平伸二（2019）．小売店舗における従業員の防犯教育プログラムの開発（２）：従業員の防犯意識と防犯対策，ホスピタリティとの関連　犯罪心理学会研究，54，特別号，86-87.

大久保智生・谷伊織・稲垣勉・鈴木公啓・永冨太一（2018）．心理尺度との相関による不審者事前検知システムの検証：DEFENDER-Xで使用されているVibraimage技術に基づいたメンタルチェッカーの指標と心理尺度との関連　香川大学教育学部研究報告，150，23-30.

齊藤知範（2018）．一般緊張理論の観点から見た高齢者犯罪　犯罪社会学研究，43，25-41.

皿谷陽子・平伸二（2017）．スーパーの万引き防止対策について（２）：店長と従業員の万引きに対するアンケート調査の比較　福山大学こころの健康相談室紀要，11，43-51.

皿谷陽子・大久保智生（2021）．店員教育がホスピタリティと防犯意識に及ぼす影響：店内での万引き防止の取り組みについて　日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌，

31，79-88.
皿谷陽子・大久保智生・平伸二（2019）．小売店舗における従業員の防犯教育プログラムの開発（1）：防犯意識尺度の作成と信頼性・妥当性の検証　犯罪心理学研究，54，特別号，86-87.
矢島正見（2018）．社会経済状況の変化と高齢者万引き・万引き高齢者　犯罪社会学研究，43，15-24.
山岸まなほ・豊増佳子（2009）．日本型ホスピタリティの尺度開発の試みと職種間比較　国際医療大学紀要，14（2），58-67.
全国万引犯罪防止機構（2010）．第5回全国小売業万引被害実態調査報告書